

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	七森 真央 (ななもり まお)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	人間科学研究科修士課程 1 年
発表年月 または事業開催年月	2022 年 10 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	認知・行動療法学会第 48 回大会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	七森真央
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	日常生活下の社交場面における自己注目の誘発要因の検討
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>【目的】社交不安症 (Social Anxiety Disorder: 以下, SAD) とは, 他者の注目を浴びる可能性のある社交場面に対する著しい恐怖または不安を特徴とする精神疾患である (American Psychiatric Association: APA, 2013)。SAD の主な維持要因として自己注目 (Self-focused attention: 以下, SFA) が挙げられる (Clark & Wells, 1995)。SFA とは自己の内部で生成された情報に注意を向けることである (Ingram, 1990)。SAD においては, 他者の視点から自分自身を見る観察者視点 (Observer perspective: 以下, O 視点) の SFA が不安や恐怖を維持させる (Spurr & Stopa, 2002)。また, 身体感覚への SFA も不安と関連がある (Clark & Wells, 1995)。心拍に注意を向ける操作によって不安が高まる一方, O 視点の SFA は減少することが指摘されている (Wells & Papageorgiou, 2001)。また, O 視点の SFA は, 身体感覚ではなく他者を知覚したときに生じると指摘されている (Hass & Eisenstadt, 1990)。したがって, 身体感覚への SFA と O 視点の SFA は, 注意が自己に向かうという点では同じ意味を持つが, 質的に異なる概念であることが考えられる。SAD の認知行動モデルでは, 社会的危険を察知した後や聞き手を認識した後に SFA が生じると指摘されている (Clark & Wells, 1995; Heimberg et al., 2014)。これまでの SFA に関する研究では, スピーチ場面などの不安を感じる特定の社交場面を設定して課題を行う研究 (e.g., 富田他, 2018) や, 参加者に特定の社交場面を想起させ SFA を測定する研究 (e.g., Wells et al., 1998) などが行われてきた。しかし, 実際の日常生活における複数の社交場面を捉えた研究は少なく, また O 視点の SFA と身体感覚への SFA のそれぞれが高まるような社交場面内の具体的な誘発要因については明らかにされていない。そこで, 本研究では生態学的経時的評価法 (Ecological Momentary Assessment: 以下, EMA; Shiffman, Stone, & Hufford, 2008) を用いて日常生活下の社交場面での 2 種類の SFA の誘発要因を検討することを目的とする。</p> <p>【方法】対象者: Liebowitz Social Anxiety Scale 日本語版 (LSAS-J; 朝倉他, 2002) の合計得点が 30 点以上の大学生・大学院生 22 名 (男性 4 名, 女性 18 名, 平均年齢 20.82 ± 2.06 歳) を分析対象とした。</p> <p>調査材料: 日常生活下の社交場面に関する Web アンケート: LSAS-J に基づく日常生活で経験した社交場面の種類, 社交場面の詳細 (想起バイアスを最小化するために測定), 社交場面における 9 つの刺激 (視線, 否定的反応, 肯定的反応, 評価, 権威, 発言環境, 初対面の人, 知り合いの人, 親しい人) の知</p>	

覚、それらの刺激に対する恐怖度、O 視点の SFA、身体感覚への SFA を尋ねた。

手続き：研究説明を行うための参加者との面談後、Web アンケートによる EMA 調査を 10 日間実施した。Web アンケートの URL が記載された E メールを 1 日 3 回 (12:00, 17:00, 22:00) 参加者に送信し、回答時から過去 5 時間以内に経験した社交場面について回答を求めた。

倫理的配慮：早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を得た上で実施した。

【結果】全 551 回の回答が得られ、そのうち社交場面を経験した回答数は 324 回であった。本研究で定義する社交場面には家族を含めていないため、「誰と一緒にいたか」という項目において家族と回答した 3 回分と 5 時間よりも前に回答した 5 回分を除いた全 316 回を分析の対象とした。社交場面における 9 つの刺激知覚をそれぞれ説明変数、O 視点の SFA と身体感覚への SFA をそれぞれ目的変数としたマルチレベル単回帰分析を行った。その結果、「視線」、「評価」、「権威」、「知り合いの人」は、O 視点の SFA の高さを有意に予測した。また、「視線」「評価」「権威」は身体感覚への SFA の高さを有意に予測した。次に、マルチレベル単回帰分析において有意であった「視線」、「評価」、「権威」、「知り合いの人」をそれぞれ説明変数、O 視点の SFA を目的変数、それら 4 つの刺激に対する恐怖感情を統制変数としたマルチレベル重回帰分析を行った。その結果、「視線」、「権威」、「知り合いの人」は O 視点の SFA の高さを有意に予測した。また、マルチレベル単回帰分析において有意であった「視線」、「評価」、「権威」をそれぞれ説明変数、身体感覚への SFA を目的変数、それら 3 つの刺激に対する恐怖度を統制変数としたマルチレベル重回帰分析をそれぞれ行ったところ、「視線」は身体感覚への SFA の高さを有意に予測した。

【考察】マルチレベル単回帰分析の結果から、「視線」、「評価」、「権威」の知覚は O 視点の SFA と身体感覚への SFA における共通の誘発要因であることが示された。また、マルチレベル重回帰分析の結果では、「視線」は O 視点の SFA と身体感覚への SFA の両者を有意に予測した。この結果から、恐怖度に関わらず、社交場面内で視線を知覚するだけで 2 種類の SFA が高まることが示され、視線知覚が SFA と最も関連がある可能性が示された。本研究の限界点として、参加者が知覚した刺激が実際の社交場面内に存在していたか不明であることが挙げられる。SAD 患者は健常者よりも他者からの視線を知覚しやすいことが指摘されている (Schulze et al., 2013)。SAD 患者と SAD の診断がつかない高社交不安者には維持要因などの心理的特徴の連続性が示されている (Turner et al., 1990)。社交不安傾向が高い本研究の参加者も、実際には他者から視線を向けられていなくても「視線を知覚した」と回答した可能性が考えられる。

【結論】「視線」、「評価」、「権威」、「知り合いの人」が O 視点の SFA の誘発要因であり、「視線」、「評価」、「権威」が身体感覚への SFA の誘発要因であること、特に視線知覚は両者の SFA と最も関連があることが示された。SAD には他者から見られていると感じる程度に特徴があることから、今後は行動指標を用いて視線知覚と SFA の関連を詳細に検討する必要がある。

※無断転載禁止